

第二学年 国語科学習指導案

一 単元名

表現を見つめて「表現のしかたを工夫して書く」 『ある日の自分』の物語を書く

二 単元および教材について

本単元では、「自分の思いや感情を多様な表現の中から言葉を選び、思いや感情を明確にしたり深めたりする力」を高めることを目指している。「走れメロス」を読み取る活動を通して描写の工夫を学び、その学習をいかして言語活動例ア「表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること」を受けて、保護者に向けて文化祭で行う劇の取組の様子を物語調で書くという活動を行う。

約一カ月に及ぶ文化祭の取組期間、自分の意識や心情がどのように変化したのかを客観的に見つめて物語を書くという言語活動を行い、どこでどのような描写の工夫ができるかを考えさせるため、以下の二点について確認しながら学習を進めていく。一点目は、場面の描写の工夫として、「登場人物の気持ちを映し出した情景を表現すること」を確認する。二点目は、人物の描写の工夫として、「人物の行動や様子を通して描写を表現すること」「人物の気持ちそのものを表現すること」を確認する。この二点を確認することで、伝えようとする人物の心情や場面の状況などを、読み手がイメージしやすい文章に仕上げていく。

三 生徒の実態

生活ノートや普段の授業内で生徒が記述したものを読んでみると、事実を羅列するような文になったり、自分の感情をうまく表現できていなかったりする文章によく出合う。これは、語彙力の不足と、表現技法が生み出す効果が身につけていないことが要因だと考えられる。

そこで、第二学年「言葉と向き合う」新しい短歌のために」において、描写や言葉を工夫しながら短歌を創作した。各自の設定したテーマに合わせて短歌を創作し、自分のイメージした短歌の世界が読み手に伝わるように、仲間との交流を通して言葉にこだわりながら推敲するという活動を通して、類語辞典や過去に学習してきた表現技法を用いながら表現しようとする生徒の姿が多く見られるようになった。

このような学習を経て、本単元では太宰治の「走れメロス」で学習した表現技法について、それぞれの技法が生み出す効果を考えながら自身の書く物語に活用することを目指す。また、活動の中に仲間との交流を位置付けることで、自分の意図したことがうまく読み手に伝わるのかどうかを確認し、吟味しながら記述できるようにしていく。そして、短歌と物語の創作を通して、語彙力を高め、表現技能の生み出す効果まで考えながら記述できる生徒の育成を目指す。

四 「生きてはたらく言語能力」の育成について

中学校学習指導要領解説「書くこと」(中) 第二学年イ・ウ・エ・オより

イ 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること

ウ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。

◎エ 書いた文章を読み返し、伝えたい事柄にふさわしい語句や文の使い方になっているか検討し、推敲すること。

オ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げること。

「生きてはたらく言語能力」を具体化する ～「生きてはたらく言語能力」具体化一覧表より

- 場面や登場人物などの設定や事件の発端、山場、結末などを考えて物語を書いていく。
- もっともふさわしい語句を選んで描写することで、イメージ豊かに文章に表している。
- 文章の展開や材料の活用の仕方などを踏まえ、工夫した点などについて交流、助言している。
- 意見や助言によって分かったことを、自分の表現に役立てようとしている。

岐阜県中学校国語研究会の資料にある「生きてはたらく言語能力」具体化一覧表より言語活動の着想を得た。展開として、文化祭の取組の様子をどのように表現したら保護者にわかりやすく伝わるのかを考えたり、自分の意図したことがうまく伝わるかどうか仲間同士で交流したりして、仲間の文章の工夫した点を助言できるように位置付けた。また、記述の工夫を考えることでイメージ豊かに文章を表すことができるようにしたいと考えた。

五 研究とのかかわり 豊かに書くこと部会研究テーマより

目的や意図に応じて、表現豊かな文章を書く能力の育成
 ～多彩な表現や個性的な表現を駆使し、主観性の高い文章を書く指導の工夫～

「目的や意図に応じて、表現豊かな文章を書く能力の育成」というテーマを受け、「表現豊かな」文章を書くために必要なことは、目的や意図に応じて複数の言葉の中から表現を選び取っていくことが必要になると考えた。主観性の高い文種である「物語」を書く場合、特に意識させたいことは「相手にいかに伝わるか」である。人物の心情の機微を、どんな言葉を用いて効果的に伝えるのか、あるいは、その場面でもしだす雰囲気や、どのような情景描写を用いて描くのか、読み手を意識しながら吟味していく必要がある。主観性の高い文章だからこそ、子どもたち一人一人の「言葉による見方・考え方」は多様である。一人一人の言語感覚をこれまでの生活の中で書いてきた文章をもとにとらえ、個への指導に生かしていく。(別添資料「机列表」参照)

六 単元指導計画(全五時間)

【単元のねらい】

- ・場面の様子や人物の気持ち効果が効果的に伝わるように描写を工夫する。
- ・場面の様子や人物の気持ちを表現する方法を自分の表現したい内容に応じて選択している。
- ・場面の様子や人物の気持ちを効果的に相手に伝わるように書いている。

【単元の評価規準】

時	ねらい(◎課題)	評価規準・評価方法
1	「走れメロスで学んだ表現技法を生かして、文化祭の取組をテーマにした物語を書く」という単元の見通しをもつことができる。 ◎物語を書く上で大切にしたいことを知り、今後の学習の見通しをもとう。	課題設定 描写を工夫して書くために必要なことは何かを考え、活動の見通しをもつている (発言・プリントの記述内容)
2	物語の展開を考え、大まかなあらすじを考えることができる。 ◎物語の展開を考え、あらすじを考えよう。	取材・構成 発端←山場←結末という展開に則して、物語のあらすじを考えている。 (発言・プリントの記述内容)
3・4	あらすじをもとに、伝えたいことが読み手に伝わるように描写を自分なりに工夫しながら、物語を書くことができる。 ◎伝えたいことが読み手に伝わるように描写を工夫しながら、物語を書こう。	記述 伝えたいことが読み手に伝わるように描写を自分なりに工夫しながら、物語を書いている。 (発言・プリントの記述内容)
5 本時	人物の心情を描写した表現について、意図を明確にして読み手に伝わる表現に推敲することができる。 ◎どのような表現を工夫したら、表現したい人物の心情が読み手に伝わるだろうか。	推敲 伝えたい人物の心情が相手に伝わるように表現を工夫し、意図を明確にしながら推敲している。 (発言・プリントの記述内容)
6	書いた文章を仲間と交流し、自分の表現に役立てようとするができる。 ◎仲間の書いた文章を読み、意見や感想を交流しよう。	交流 工夫した描写について交流したり助言しあったりして、自分の表現に役立てようとしている。 (発言・プリントの記述内容)

七 本時のねらい
 人物の心情を描写した表現について、意図を明確にして読み手に伝わる表現に推敲することができる。
 八 本時の展開 (5/6)

学習活動

指導・援助

導入
 ◇工夫や改善を図る描写を明確にする。
 ・仲間の作品を読み、人物の心情がうまく伝わっていない箇所を線を引き、工夫や改善を図る描写を明らかにしあう。
 ◇本時の課題を確認する。

どのよう表現を工夫したら、表現したい人物の心情が読み手に伝わるだろうか。

展開

◇交流の仕方を知る。
 ◇交流①「読み手の感じ方を知り、自身が推敲すべき表現を明確にする交流」
 ・線を引いてくれた部分について、どう感じたのかを詳しく教えて欲しいんだけど。(生徒1)
 ・緊張している様子を伝えたいんだけど、「緊張」という言葉しか使われてないから、緊張している様子があまり伝わってこないんだよね。(生徒2)
 ・練習に手応えを感じているみたいだけど、もっとやる気が溢れている姿を描写できないかな。(生徒3)
 ◇読み手に伝わる表現になるように推敲する。
 (生徒1の意識)
 ・緊張した様子がはっきり伝わらないというアドバイスをもらったから、他に何かいい表現がないか類語辞典を使って調べてみよう。
 ・緊張する様子を「鼓動が速くなる」と表現できるみたいだから使ってみよう。
 ・緊張すると汗をかくことがあるから、それを表現に使ってみよう。

◇交流②「人物の心情が読み手に伝わる表現に推敲できたかを確認したり、推敲した意図を明確にしたりする交流」
 ・こうやって直してみたけどどうかな。(生徒1)
 ・鼓動が速くなる」という表現になったことによって、最初の表現に比べて緊張している様子がはっきり伝わってくるようになったし、「手に汗を握る」という表現が付け加えられたことよって、本当に緊張している様子が伝わってきた。(生徒2)
 ・天気が曇りから晴れに変化したことで、達成感を味わっていることが伝わるようになった。(生徒3)

終末
 ◇本日の授業を振り返る。
 日常生活の中で、感情を表す言葉をよく使っている。しかし、見たものをそのまま表現するだけでは、工夫がないために、面白みのない物語になってしまおうということがわかった。
 人物の心情を別の言葉に置き換えたり、一日の天気の変化で表現したりすることで、より印象的で魅力のある物語にすることができた。今後の生活の中でも、今回学んだ「描写」の工夫を取り入れて文章を書けるようにしていきたい。

●グループごとに作品を読み合い、書き手の意図が伝わっていない箇所を線を引きかける。

●学習プリントに、書き手の意図と読み手受け取り方のずれをメモする欄を作っておく。

●交流の仕方のモデルを示しながら、交流の流れと視点を理解させる。

●事前に捉えた子どもたちの表現上の特徴をもとに、それぞれの課題意識を解消し合える三人グループを編制する。

●誰のどんな表現が、読み手に伝わる表現に推敲できるヒントとなるのかを事前にとらえておき、推敲する際に困りそうな生徒に対して助言できるように準備しておく。
 ●必要に応じてヒントカードを渡せるよう準備しておく。

●どのように描写を工夫すればよいか悩んでいる場合、ヒントカードを配布し、仲間の物語を参考にして推敲させる。仲間から意図を聞くように助言する。

●手が進まない生徒が多い場合は途中で全体交流を入れる。そこで、「何を使って、どのように工夫したか」を数名の生徒を指名して発表させる。

《工夫するためのヒントとして》

●類語辞典を活用して別の表現ができないか考えられるようにする。

●『走れメロス』で学習した「言葉の工夫」と、「描写の工夫」をプリントにまとめ、配布できるようにしておく。

●これまでの「読むこと」の学習で取り上げた教材の中からも、物語を書く際に使える工夫をまとめ、プリントを作成しておく。

○自分がどのように推敲したのかを明確にして振り返りを書きまとめるように指示する。
 ○評価を見届けられるようにするために、感想をまとめる終末の時間を十分に取る。

【評価規準】
 伝えたい人物の心情が相手に伝わるように表現を工夫し、意図を明確にしながら推敲している。

(プリントの記述内容)